

入学試験問題 「小論文」(その一)

次の記事を踏まえて「個の尊重」の価値観について、あなたはどのように考えますか。
800字以内で意見を述べなさい。

受験番号

【課題文】

食卓から見た家族の変容 「個の尊重」で自主性任せ

浮かび上がった「共食」の価値

家庭の食卓のありさまを定点観測してきた、大正大客員教授の岩村暢子さんがこのほど、福岡市で講演した。戦後重視されてきた「個の尊重」という価値観に、私たちはきちんと向き合えていたのか――。そう考えさせられる報告だった。(特別編集委員・長谷川彰)

岩村さん講演

岩村さんは、かつて大手広告会社でマーケティング調査に携わる中、1960年以降に生まれた人々の価値観や行動はそれ以前の世代と異なり断層があると気づき、98年、主婦を対象に家庭の食卓調査を始めた。アンケート、一週間計21回の食事の記録写真と日記、詳細な面接を併せた「超定性調査」を重ね、首都圏の計240家族を分析。考察を計7冊の著書で明らかにしてきた。講演はそれを踏まえた問題提起だった。

■親も子もバラバラに

調査初期の5人家族の昼食が紹介された。休日だが父親は仕事で不在。小4から小1の3兄弟はコンビニのおにぎりやファストフード店のハンバーガー。母親は自分で作った焼きそば。

「バラバラな時間にバラバラなものを食べていた」

母親は「カップ麺や冷凍食品などを買い置きしているが、子どもたちは自分の食べたいものがなければ、それぞれ好きなものを、持たせたお金で買いに行く」と説明。自由、好みを尊重し、自立と買い物の練習をさせているのだという。

同様の事例は「ネグレクトや虐待などなく、家計に何ら問題のない家庭」で普通に見られるとして、昔あった正しい姿からの「乱れ」ではなく、善悪の視点を離れた「変容」と捉え、それは何がもたらしたのか冷静に考えるべきだという。

象徴的な現象の一つは「共食」の衰退。生活の多忙化や多様化というより、親も子も空腹でなければ食べなかったり、お菓子で済ませたり。誰かに合わせて一緒に食べるより、各自のペース任せを容認・尊重する食事が常態となっている。

まず自主性、自由の尊重が言われ、意に沿わないことを押し付けられるのは嫌だから他者にも求めない。家族で食卓を囲んでも楽しいことが最優先だ。

これは「同席の食であって、同じ釜の飯を食べる共食とは異なる」。おのずと個々の好みに合わせて、パーソナルサイズの中食やレンジ調理できる簡便食品が、単身者向けではなくファミリーユースとして日常的に使われている。

■みんなで同じものを

岩村さんは「共食の衰退は家族の健康問題にもつながっている」と指摘する。

入学試験問題 「小論文」(その二)

先の5人家族は10年後の追跡調査にも応じた。17〜20歳になった3兄弟にはそれぞれ、頻繁な無断外泊やひきこもり、肥満や摂食障害が見られた。母親は「手作りしたものを兄弟そろって食べさせていた」と事実とは異なる記憶を語り「子どもは今、自立する準備段階で難しい時期」などと答えたという。この事例に限らず10〜20年後まで追跡できた89家庭のうち、自由任せの家では「明らかに健康問題が多く見られた」。

逆に、食に起因する病気がなく健康が保たれていた家の共通点も浮かび上がった。手作りかどうかやごちそうの有無などではなく「みんなで同じものを食べて、個々の自由はかなえられていなかった」ことだった。祖父が孫と同じシチューを食べ、子どもが父親の好みの煮魚も食べる。好みの異なる人との共食は「期せずして偏りのない食事になっていた」と解釈する。

岩村さんは「オヤジが頭ごなしに無理強いするような昔が良かったという単純な話ではない。私たちは個の尊重という大事な価値観を狭く捉え、干渉することなく好き勝手を認め合うことと取り違えてきたのではないか」と語る。『今どきの主婦は』などと人ごとのように批判するのではなく、男女を問わず、わが身に照らした内省が不可欠だと自覚しているという。

戦後の新教育で「個の尊重」に初めて触れた人々も今や90歳近い。岩村さんの調査対象は、その世代に育児書などで育てられた1960年以降生まれの人が、親となって形成する家族。今、子育て中の家族の大半を占める。講演の指摘は、単に食のあり方にとどまらない、日本人の家族と暮らしへの警告に思えた。

西日本新聞・朝刊 2024年11月6日(1635字)

注意 (1) 字数は所定の原稿用紙二枚以内。時間は六十分。

(2) この紙の余白はメモ用紙として自由に使用してよいが、終わったら

机の上に原稿用紙(小論文)と一緒に置いて、持ち帰らないこと。